流通科学大学　高等教育推進センター紀要　第７号，111-118（2022）

GSP クラス中国語授業における指導法に関する一考察

―中国語検定試験の受験結果に基づいて―

Consideration about a Teaching Method in the GSP Class of Chinese
―Analysis by the Results of the Chinese-Proficiency Tests―

藺　梅*

Mei Lin

本稿は本学のグローバルスタディーズプログラムクラスにおける中国語教育の指導法について考察するものである。本稿では、まず 2014 年度までの「観光中国語特別クラス」において行った指導法のもとで中国語検定試験の受験結果の考察を踏まえたうえで、2016 年度以降のグローバルスタディーズプログラムクラスに取り入れた反転授業、シャドーイングトレーニングなどの新しい指導法について、取り入れた背景や実施方法及びその効果を考察する。

キーワード：中国語検定、反転授業、アクティブラーニング、ICT 活用、シャドーイング

Ⅰ．はじめに

2015 年度より本学ではグローバル時代に相応する人材育成の趣旨に基づき、一年後期から英語と中国語を同時に学ぶグローバルスタディーズプログラムクラス（以下 GSP クラスと称する）がスタートした。本学では従来の中国語科目が少なく対応できないため、GSP クラス生のために「中国語 A・B」、「グローバル基礎中国語」の基礎科目に加え、「中国語リスニング」、「中国語資格試験準備 A」「中国語資格試験準備 B」の科目を新たに開講した。GSP クラス対応の授業は週に二コマの３時間、一年後期から二年後期まで３セメスターの期間となっている。

GSP クラスは 2015 年度より開講して、すでに７年目に入っている。中国語コースでは、一年次後期より習い始め、翌年の 6 月に「日本中国語検定」[1] 試験４級の受験を課すことも、すでに６年間継続している。本稿はその 6 年間の受験状況を鑑み、GSP クラスにおける中国語教育の指導法、特に 2016 年度以降の新たな試みの効果などについて考察したい。

Ⅱ．2015 年度生の指導法及び受験結果

GSP クラスの最初の達成目標はどのレベルに定めるかに関して、本学の 2011 年～2014 年度に開講していた「観光中国語特別クラス」の習得状況を参考にした。

* 流通科学大学人間社会学部、〒651-2188　神戸市西区学園西町３-１

（2021 年 12 月 10 日受理）

©2022 Center for Promotion of Higher Education

2014 年度まで本学では「観光中国語特別クラス」（2011-2014）が中国語教育の特別プログラムであった。当初の目標としては、3 セメスターにわたって中国語受講の時間数は約 120 時間の計算となるため、日本中国語検定４級[1] に合格することを達成目標と決めた。

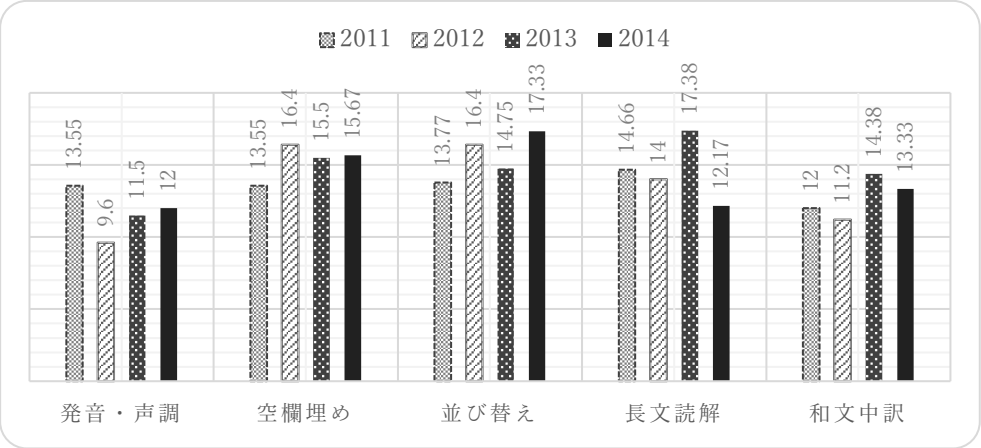

図 1.　（2011-2014）中国語検定 4 級筆記問題スコア平均値

その結果は図 1.で示した通りに、筆記問題の 5 項目のそれぞれの平均値はほぼ合格ライン[2] に達成している。また、筆者はその結果について考察（蘭 2015）し、次のような問題点があることが分かる。

「本学での「観光中国語特別クラス」の中国語検定受験の結果に基づき考察したことにより、教室での指導は学習者の習得状況を大いに左右することが明らかにされた。現在行っている授業での問題点として、①「発音・声調」の結果から教室での音読トレーニングが不足しているとみられる。②文法指導において学習者は文法の規則を理解したものの、総合的な運用能力が非常に弱いことが「和文中訳」の結果で分かった。今後の中国語の授業において、リスニングにも繋がる音読トレーニングを強化しなければいけないうえで、文法規則を総合運用する力も鍛えなければならない。中国語の時間数が限られているため、以上の二点を達成するには、教材や時間外の自習スタイルの確定などのことも課題となる。」[3]

GSP クラスの授業時間数は、一年後期から学び始め、翌年の６月の下旬まで約 80 時間となる。目標設定については講義時間数が足りないものの、学習者は英語力を測る選考による者であり、学習能力が比較的高いという判断によって同じく中国語検定４級に合格することにした。

GSP クラス一期生の学習者に指導する際に、蘭（2015）の考察を意識しながら、音読と文法の指導を強化したが、やはり授業時間数が大幅に減ったため、1 回目の検定の受験の結果は望む通りにはならなかった。図２．で示したように、リスニングの平均スコアは 60 点を満たさず、筆記の“発音・声調”と“長文読解”の平均値も合格ライン以下であることが分かる。「日本中国語検定」4 級の合格基準はリスニングと筆記それぞれ 60 点以上となっているため、2015 年度生の合格率は全国受験者の平均値に達することはできず、筆記の“発音・声調”の項目がその他の項目より低く、結果的に筆記全体の点数も合格ラインに達せない受験者が多くいた。

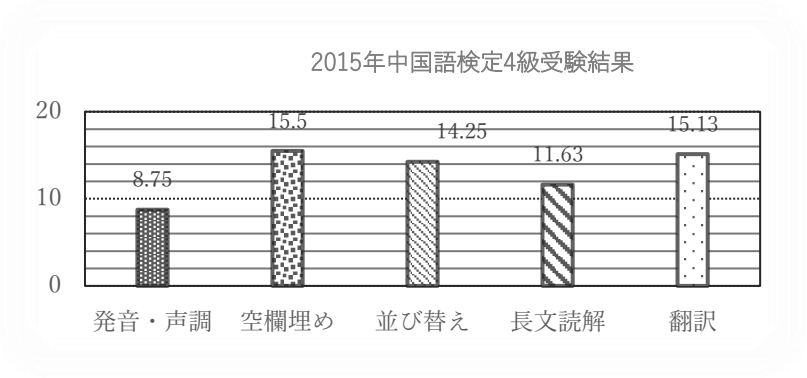

図２．2015 年度 GSP クラス中国語検定筆記問題スコア

以上の受験結果を受け、以下の点を改善すべきだと考えた。

① 限られた講義の時間数において、いかに中国語検定 4 級レベルの知識を伝達するか。

② いかに学習者の発音に対する苦手意識を軽減させ、かつリスニング力を向上させるか。

③ 学習者に学習した知識をいかに定着させるか。

Ⅲ．2016 年度よりの新たな取り組みについて

1．時間外学習をさせる「反転授業」

藺（2016）では反転授業を導入する必要性について「講義型の授業であれば、一つの文法を説明するとき 10 分で終えることに対して、グループで話し合いながらドリル問題を解いていくには倍以上の時間が必要になってくる。90 分の授業という限られた時間内でアクティブラーニングを取り入れながら一定の知識の伝達量を確保するには極めて困難である。そこで必要になってくるのは、反転授業との組み合わせの形で語学学習を進めていくことである。つまり授業での活動の一部を自宅で行い、行ってきたことを教室でグループ学習を通して完成するということである。」[4] と述べている。そこで、2016 年度の GSP クラスでの指導にあたり、一年目の指導結果を踏まえ、上記の三つの課題について改善する実践を行い始めた。

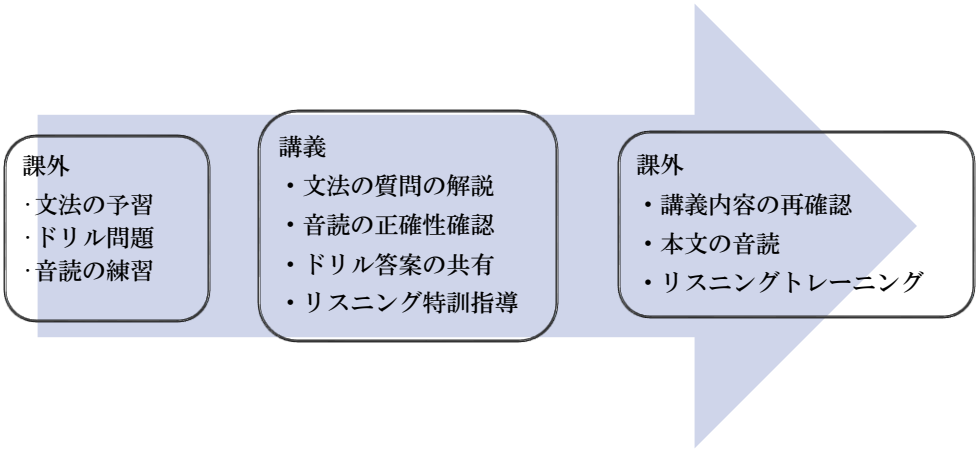

図３．現行の反転授業のイメージ図（筆者作成）

図３のように、まず授業時間外に文法を受講者自身によって理解し、練習問題を解いていく。

また音読やリスニングの練習問題をすべて自分で行ってもらう。これらの自習活動ができることにより、講義時間内ではより合理的に時間の分配ができるようになると考えている。次に授業中にグループでそれぞれ自分の解答を共有し話し合ってもらう。グループ内で解決できない質問を提示させ、教師は解説する。また、自習で練習した音読について教室で確認し指導を行う。授業中に学習者のアクティビティ状況を観察し、理解の不十分な文法項目や音読のさらなる練習の内容を課題として自習させる、こうして再度の確認により知識の理解を深めると同時に定着にもつながると考えている。

2. 知識を定着させる方法の一つ：アクティブラーニング

SP クラスにおけるアクティブラーニング形式の取り入れる大きな狙いは、学習者の能動的に学習することである。白井（2011）は「学習者が知識や技術を身につけようとする積極的な態度がなければ、学習効果は大きくないばかりか、受動的になりやすく、内発的動機付けを喚起しにくく、多くの落ちこぼれを生み出すとも言われている。」[5] その違いについて、蘭（2016）の従来の授業スタイルとアクティブラーニングスタイルの比較した結果からみても明らかであった。

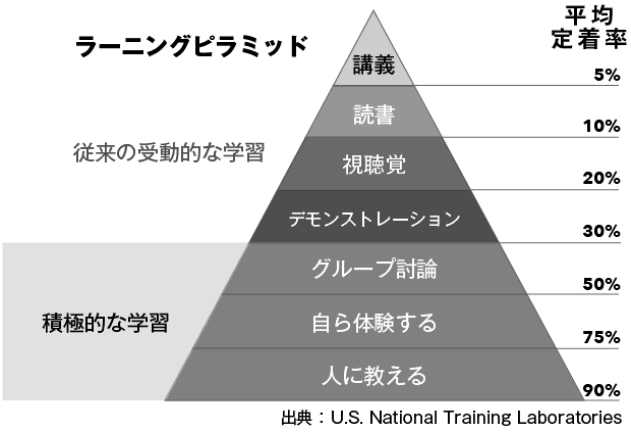

図4. ラーニングピラミッド

図４．ラーニングピラミッド[6] に示されたように、教師の一方的な知識伝授の講義より学習者自身の話し合いや体験のほうが知識の定着ははるかに良いと明確している。

白井（2011）は大学で行う多くの講義や演習においても、効果的なグループ学習を取り入れた学習者主体の授業を行い、学生自らが主体的、能動的な学びの営みに参画する機会や場を多く設けていれば、学びの本質を理解し、自らの知識を統合していく力を身に付けることになる[5]。

さらに授業時間数の少ない中、学習した知識を定着させるための一つの方法としては、アクティブラーニングという授業スタイルがより重要だと考えている。

実施方法としては：

1）受講者を毎回ランダムでグループに分け、授業時間外でしてきたドリル問題などの答えを共有し、答えが一致するかどうかを確認しながら話し合ってもらい、最後に教師が課題の解答

を提示する。また話し合った中で出た質問を教師は解説する。

2）音読練習の報告は必ずペアでみんなの前でしてもらう。これは相手からのプレッシャーと人の前で読む緊張感を持たせることである。

3）課題の正解者に皆さんのために説明をしてもらい、不十分なところは教師が補う。

3. ICT 活用＆Moodle サイトの利用

授業時間数が足りない中、講義時間内においてどのようにして最大限に有効に使うかも工夫しなければいけない課題である。ICT 活用はその対策の一つとなる。ICT 活用において様々な形式はあるが、本講義では次の三つの活用をしている。

1）講義内容を事前にパワーポイントで作成し、講義中提示しながら説明を加える。そうすることにより、従来の板書をする時間を最低限にすることができ、繰り返し提示することもできる。

2）スマートフォンの便利さを活かし、語学学習のアプリケーションを用いて随時発音の練習やリスニングの練習ができる。

3）教えた知識を定着させるために、クイズ形式を用い、学習者同士で競い合いをさせることにより、中国語を学ぶモチベーションのキープにも繋がる。

講義時間外では、学習者がいつでもどこでも課題をしたり、音声を聞いたりすることができるように、2016 年度より本学の Moodle サイトを利用している。

山本・藺・田村（2017）では、語学学習における本学の Moodle サイト利用のメリットについて、「中国語検定試験は受講生にとってハードルとなるのはリスニングである。…Moodle の利用が可能となり、Moodle を授業に連携させ受講者自身の講義時間外でのリスニングの個別訓練が実現できた。即ち、講義時間内に行ったリスニング訓練用の音声ファイルを Moodle にアップロードし、受講者はいつでもどこでも繰り返し聞くトレーニングができるようになり、受講者の時間外の自習が可能となった。」[7)]

4. リスニング指導へのシャドーイングトレーニングの取り組み

日本語ネイティブの学習者にとって、中国語を習得するには最も難しいとされるのがスピーキングとリスニングである。その原因の一つは日本語という言語の特性に関わっていると考えられる。日本語の母音が少なく発音はさほど難しくない。しかしながら、外国語を習得する際に、発音のハードルがとても高く感じてしまう。母音の多い中国語を学ぶ日本人学習者にとっては、読み書きができても、リスニングの向上はいつも課題となっている。さらにリスニングは他の３技能に比べ、受動的活動になり聞き取れないとモチベーションも下がりがちである。

では、リスニング力を向上させるのはひたすら聞くことでよいか、「リスニングは決して耳だけの作業ではなく、全身体的な営みと言っていいでしょう」（門田・玉井.2019 ）[8)]。というのはリスニング力というより聴解力と言ったほうが分かりやすいだろう。コミュニケーションの中で相手の話したことを聞いて理解できるのが最も重要である。聴解力を高めるためには鈴木

（2007）の研究から教育的な示唆を受け、GSP クラスの学習者に中国語検定のリスニング力を向上させるため、シャドーイング訓練を取り入れた。

この指導の手順としては、まず単語の発音を繰り返して真似をさせ、次に中国語の文の意味を理解したのを確認した後、その文の音読は復唱ではなくシャドーイングで訓練を行う。このような指導法を実施することによって、学習者が中国語の音読に対する抵抗感が次第になくなり、学習者からのコメントも「口が開けるようになった」と変化をしている。リスニング力の向上のために、教科書から検定試験問題の質問文までシャドーイングの音読方法を常に実行していた。

では、上述の指導法に取り入れた効果は如何なるものか、2016–2020 年度の中国語検定の受験結果で検証したい。

Ⅳ. 考察

まず、リスニングのスコアについて考察したい。2014 年度までの「観光中国語特別クラス」の授業時間数が約 118 時間の学習した後の受験結果のリスニングスコアは（添付資料２）68.13 となり、GSP クラスが開講した 2015 年度のリスニングスコアは 59.38 となっている。2016 年度以降新しい指導法によって、5 年間（年に一回受験）の受験結果のリスニングスコアは 74.11 となっている。即ち、新しい指導法による受験の結果は、2014 年度までのスコアと 2015 年度のスコアよりも高くなっていることが分かる。このデータによって音読の強化やシャドーイングトレーニングの有効性が確認できたと考えている。

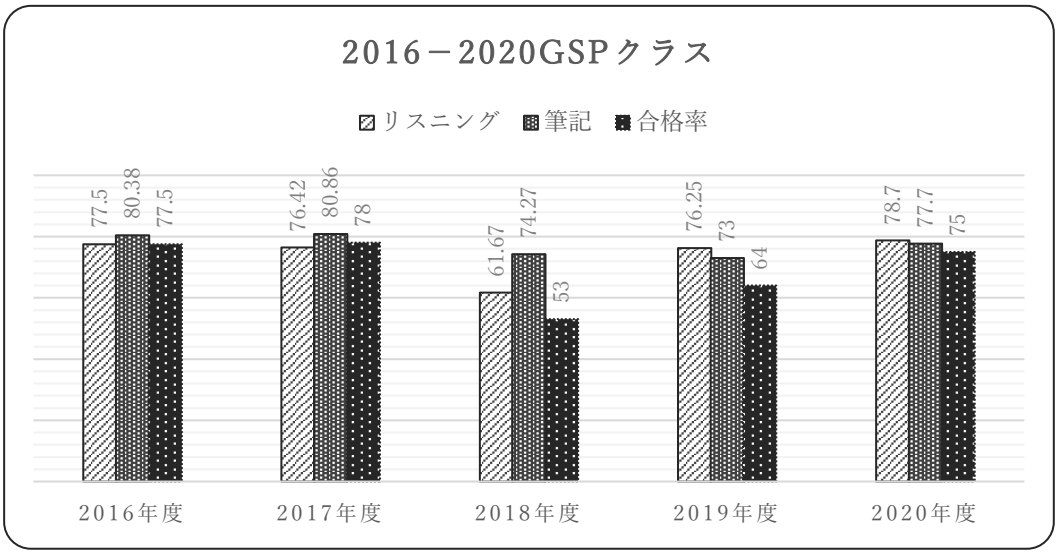

図 5. 2016–2020GSP クラス中国語検定スコアグラフ

次に筆記試験のスコアを見てみよう。2011 年度から 2014 年度までの「観光中国語特別クラス」の筆記試験スコアの平均値（添付資料２）はそれぞれ、67.53、67.6、73.51、70.5 となり、2015 年度 GSP クラスの筆記試験のスコアは 64.13 となっている。2016 年度以降新しい指導法によって、5 年間（5 回）の筆記試験スコアの平均値が 77.24 であった。2016 年度以降の筆記試験スコアの上昇内訳については、項目１の“発音・声調”と項目５の“中訳”が挙げられ

る。“発音・声調”の項目はリスニングと同様、授業時間内及び授業時間外に音読の強化とシャドーイングのトレーニングによってもたらされた結果だと考えられる。一方、中訳の正解が多くなったのは、反転授業とアクティブラーニングの取り組みによって、知識の定着に繋がったと考えている。

しかし、2016 年度以降の受験結果からさらに分析すると、一つ問題点が伺えた。それは筆記試験の項目 4 の“長文読解”のスコアであった。5 年間（5 回）の中で長文読解のスコアがそれ以前のデータと比べて下がっているかまたは横ばいであった。こうなった原因としては、授業時間内の時間の分配の偏り及び授業時間外の課題の作業の不十分ではないかと認識している。今後の指導にあたって、長文の読解能力を高めることを工夫しなければならない。

Ⅴ．終わりに

本稿では、2011 年度から 2020 年度の中国語学習者の「日本中国語検定」4 級受験の結果に基づき、GSP クラスが開講されて以来、中国語授業における新しい指導法の取り組みの効果を検証してみた。限られている期間において、如何にして学習者により効果的に中国語を習得させるかという課題は依然残っているが、2016 年度より学習者に対する指導法も、まだ不完全な点があるものの、改善する前の習得状況より有意義な効果があることが明らかにされた。

GSP クラスの中国語を習得するもう一つの目標は、HSK（汉语水平考试）4 級のクリアとしている。より効果的に中国語教育をしていくためには、学習者への指導法をさらに研鑽しながら実践をしてみたい。

資料 1.

4級	**中国語の基礎をマスター** 平易な中国語を聞き，話すことができる。 （学習時間 120～200 時間。一般大学の第二外国語における第一年度履修程度。） 発音（ピンイン表記）及び単語の意味，常用語 500～1,000 による単文の日本語訳・中国語訳。

出所：「日本中国語検定協会」ホームページ：http://www.chuken.gr.jp/

資料 2.　2011-2014 中国語検定試験受験結果データ

項目	発音・声調	空欄埋め	並び替え	長文読解	翻訳	筆記問題平均値
2011	13.55	13.55	13.77	14.66	12	67.53
2012	9.6	16.4	16.4	14	11.2	67.6
2013	11.5	15.5	14.75	17.38	14.38	73.51
2014	12	15.67	17.33	12.17	13.33	70.5

（各項目 20 点満点）

資料 3.　2015 年 GSP クラス中国語検定 4 級項目別データ

受験者	リスニング（点）	筆記（点）					
		発音・声調	空欄埋め	並び替え	長文読解	翻訳	筆記合計
No. 1	85	12	18	18	13	17	78
No. 2	65	12	16	16	14	17	75
No. 3	60	8	18	10	17	14	67
No. 4	65	8	14	16	11	16	56
No. 5	50	8	16	14	14	16	68
No. 6	60	8	14	16	7	17	62
No. 7	35	10	14	14	13	13	64
No. 8	55	4	14	10	4	11	43
平均値	59. 38	8. 75	15. 50	14. 25	11. 63	15. 13	64. 13

引用文献、注

1）「日本中国語検定協会」ホームページ：http://www.chuken.gr.jp/

2）中国語検定試験の筆記問題の基準は、60 点合格、100 点満点とし、５項目に分けられている。

3）蘭梅：「中国語の授業における指導法に関する一考察」『流通科学大学論集―人間・社会・自然編―』, 第 28 巻(第 1 号), (2015) 43-52.

4）蘭梅：「中国語の授業に取り組むアクティブ・ラーニングの試み」『流通科学大学論集―人間・社会・自然編―』, 第 29 巻(第 1 号), (2016). 109-116.

5）白井靖敏：「アクティブラーニング（グループ学習）の経験に基づく学習タイプ」『名古屋女子大学紀要』（人・社）（2011）117-125.

6）出所：https://blog.goo.ne.jp/juku-ni/e/1a90a6ab3ff4abc32739a9bf83926e65

7）山本勝巳・蘭梅・田村弘行：「流通科学大学における Moodle を利用した多言語学習環境の構築と運用」『流通科学大学高度教育推進センター紀要』，第 2 号，（2017），15-25.

8）門田修平・玉井健：『決定版英語シャドーイング』2019，180-190.

9）鈴木久実：「シャドーイングを用いた英語聴解力向上の指導についての検証」
https://www.eiken.or.jp/center_for_research/pdf/bulletin/vol19/vol_19_p112-p124.pdf